複雑さと向き合う

飯田祐子・中谷いずみ・笹尾佳代編著
『プロレタリア文学とジェンダー　階級・ナラティブ・インターセクショナリティ』書評

陳奕汎

本書は、1920年代から30年代にかけて勃興していたプロレタリア文学を中心に、左翼的文化生産の領域における階級の論理と、ジェンダーをはじめとするカテゴリーとの複雑な交渉関係を明らかにしたものである。1980年代以降、日本プロレタリア文学研究にジェンダー批評を取り入れる動きを受け継ぎつつ、マルクス主義フェミニズムやインターセクショナリティの今日的な見地を駆使して左翼文学実践に内包される問題点と新たな可能性を意欲的に見出すことが目指されている。

階級とジェンダーの関係を読み直そうとする問題意識は、前編の『女性と闘争――雑誌「女人芸術」と一九三〇年代前後の文化生産』（2019）から一貫しているものである。前編の議論を踏まえながら、本書は東アジアの同時代性や特定の雑誌から、日本のプロレタリア文学という〈場〉へと関心を移行した。P・ブルデューに依拠したと考えられる〈文学場〉という捉え方によって、プロレタリア文学及び言説の生産・流通・消費をめぐる社会的・経済的状況のみならず、左翼文学とみなされない運動周辺の文学作品も視野に入れている。この〈文学場〉を排他的ではない自律的な社会的・文化的空間として、内部の構成や外部との関係をより動的かつ全面的に把握している。それを踏まえ、作家や作品ないしトピックを空間的に位置付けることで、諸力が錯綜するプロレタリア文学の〈場〉の様相と論理を総括的に手際よく浮上させた。

構成は全3部11章からなる。第1部と第3部では、階級闘争の実践をめぐるジェンダー・ポリティクスが検証された。第1部で扱うのは、革命にかかわる女性たちの後衛的配置である。階級問題に前進的な姿勢を見せる左翼運動は、批判対象とされた資本主義とブルジョア階級の思想と、女性に抑圧的なジェンダー力学を共有しているという問題が浮き彫りにされている。「愛情の問題」を再検討する1章では、徳永直「『赤い恋』以上」の間テクスト性に着目し、運動の論理と親密関係の軋轢を問い直す徳永の姿勢が描出されている。2章は「ハウス・キーパー」問題を「身分」と「仕事・役割」の側面に沿って整理し、組織内の女性の階級構造とその差別性を指摘した。3章では、「救援」することに新たに焦点をあて、投獄された党員の家族が救援の対象／主体となる語りとレトリックの分析を通して、女性が再生産の領域に周縁化された構造が解明されている。

第3部は、運動の前衛的領域に配置された、闘争主体となる女性表象を取り上げている。8章では、運動の周辺に目を向け、20年代後半の娼妓をめぐる表象の分析を通して、労働運動と廃娼運動の接点が指摘されている。9章では、平林たい子「施療室にて」を対象に、男性ジェンダー化された闘争主体の再生／覚醒する物語に回収しきれない、妊娠・出産の体験を持つ女性の身体感覚や他者性について分析されている。10章と11章は1930年の東京モスリン争議が題材となった佐多稲子「モスリン争議五部作」と中本たか子「東モス第二工場」を扱い、階級的に覚醒した女工同士の葛藤や分断をたどりながら、それを乗り越える連帯の可能性を見出した。

第2部では、闘争と直接的な関わりをもたない女性表象が分析対象となって、階級とジェンダーや帝国主義など複数の力学が関係しあう様態が精査されている。4章の山川菊栄「石炭がら」論と5章の葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」論は、同時代の時代背景を附置しつつ、プロレタリア文学の場における「女性」という文学的表象の可能性と困難を指摘した。6章と7章では、吉屋信子『女の階級』と佐多稲子の朝鮮戦争期小説をプロレタリア文学研究の枠組みに持ち込むという果敢な試みが行われている。前者は、左翼運動に関与していない吉屋信子が外部の視点から革命運動における性差別を摘発し、階級・ジェンダー・障害などの境界を横断する関係性を探る作家の姿勢を論じている。後者では、プロレタリア作家佐多稲子が植民地支配の物語を語り直す行為に、戦後において帝国主義と階級やジェンダー、人種の問題をめぐる反省と思考がたどられている。こうした〈ポスト・プロレタ

リア文学〉の視点によって、戦前のプロレタリア文学場をいかに相対化し新たな論点を生み出せるのかについて、さらなる論述が期待できるところであろう。

やや簡略化された紹介であるが、本書の魅力として、多様な視点に基づく各章の論点が合致したり補足したりずれたりすることで、ハウス・キーパーや女工、母といったプロレタリア文学における女性表象を複層的に織り出した点があげられる。また、運動の実践として捉えられたプロレタリア文学と現実の関係に関して、運動実態などを実証的に検討しつつ、現実反映論にとどまらず、運動や現実に介入し理想を作り出そうとする左翼文学の能動的な役割を鮮明に提示している。

こうした研究の成果を支えているのは、複数のカテゴリー・権力関係の相互作用に着目する、インターセクショナリティの概念といえる。〈複数性〉と〈複層性〉とは異なり、インターセクショナリティは相乗や矛盾を含むカテゴリー間のダイナミズムとそれによる変化や差異を可視化させる方法論である。本書は、階級とジェンダーだけではなく、セクシュアリティや人種、障害、ネイションなどの力学にも目を配っており、プロレタリア文学場における女性表象や主体形成にあたってカテゴリーの複合的な作用を丹念に検討している。それに加え、階級のジェンダー化やジェンダーの階級化といったカテゴリー自体の変化についての指摘も的確に行っている。ただし、分析にあたるカテゴリーの選定基準・戦略と、カテゴリー間の相互作用による新たなベクトルの特殊性が十分に明示されているとは言いがたく、抑圧的ではない力学への着目によって検証がさらに深まる余地があるとも考えられる。しかしそれでもなお、本書は表象や現実の複雑さを捨象せずに向き合おうとするインターセクショナリティという視座を作品分析に応用した好例として評価に値するのではないか。

本書は、文学場やインターセクショナリティに依拠してプロレタリア文学を再考することで、近代日本の文学・文化生産の場で混ざり合う権力関係を動的に捉え、複数の差異が同居する複雑さと向き合い言語化する契機が得られるという、今後の文学研究の新たな発展性を提示する重要な実践である。

（飯田祐子・中谷いずみ・笹尾佳代編著『プロレタリア文学とジェンダー　階級・ナラティブ・インターセクショナリティ』青弓社、2022年10月）